

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32661

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510206

研究課題名(和文) 迅速な対応がもたらす患者の安心—医療環境における情報想起モデルの開発—

研究課題名(英文) An information platform model for patients in acute hospitals

研究代表者

横井 郁子 (YOKOI, Yuko)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号：90320671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は急性期病院における看護師の迅速な患者支援行動を導く情報想起の現状について明らかにし、患者支援のための情報想起モデルの開発を目的とした。看護管理者らのインタビューの結果から情報環境別想起モデルが考案された。ここでいう情報環境とはベッドサイドとスタッフステーションである。ベッドサイドでは疾患や治療により生じた生活制限の支援(設えを含む)を主とした情報を提示する仕組みを提案した。スタッフステーションではあえて他職種の動きが見え、会話が聞こえる情報提示を含む空間を提案した。情報環境を2つに区分し、それぞれの特徴を明確にした医療環境構築が患者支援のための迅速な対応を可能にすると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study we investigated the current status of the information platform for nurses, which enables prompt support actions for patients in an acute hospital, and developed an information platform model for supporting the patients. As for the bedside environment, we proposed a platform that presents the support information related to the limitations in life due to the patient's disease and/or care treatment. As for the staff station, we dared to propose a workplace where the staff can see and hear the others' works and conversations, respectively. We divide information environments into two (bedside and staff station). In order for providing the prompt supports for patients, it is of crucial importance to construct care environments with each character of these two environments clearly distinguished.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：社会・安全システム科学・社会システム工学・安全システム

キーワード：情報想起 情報環境 急性期医療 患者支援 医療環境

1. 研究開始当初の背景

申請者は医療安全の一環として病院の療養環境のあり方、とくに入院患者の転倒対策として安全な動作を導く環境調整は重要な支援と指摘してきた(横井他, 病院管理, 2007). しかし, 一方で環境調整に必要な患者情報が担当看護師に集中し, 患者のニーズに対応できない状況も明確となった. そこで, 担当看護師だけが患者を支えるのではなく, 支え合う仕組み作りが, とくに入院患者の大半を占める高齢患者には有効であると考えた. そこで患者情報の一部をピクトグラム(絵文字)という形にし, 第三者にも視認できるベッドサイドに表示することを提案し, 医療の質・安全学会学術集会において評価された(横井他, ベストプラクティス賞最優秀賞, 2007). 申請者はこれらを標準化図記号の手続きの上, 医療看護支援ピクトグラムとして開発した(図). 現場での運用の結果, 面会に来た幼児が患者である祖母を励ますといった支援も自然に生まれ, デザインコンセプトである「いのちを見守るコミュニケーションデザイン」として医療施設での新たなコミュニケーションツールとなることが明らかとなった(横井他, グッドデザイン賞受賞, SDA賞受賞, 日本タイポグラフィ ベストワーク賞受賞, すべて2009).

医療看護支援ピクトグラムを公表して約2年の現在, 申請者が把握している限りでは, 600床規模の病院7施設で運用され, 8施設で運用準備が始まっている. 病棟単位での導入は10カ所以上となっており, そのほとんどが医療安全を担当する看護職からの希望であった. そして, 各施設から, チーム医療の一助となるなどの研究結果が報告され始めている(中江, 日本医療マネジメント学会, 2010). 申請者は運用して1年経過した病院での患者評価を実施した. その結果, 患者・家族は医療看護支援ピクトグラムの導入に好意的であることが明らかとなった(横井, 日本医療・病院管理学会, 2010).

好意的な理由として, 患者は自らかの状況について自分で伝えるということに負担を感じ, 「これを見ただけで看護師がすぐに対応してくれて良かった」というものであった. つまり, 医療看護支援ピクトグラムには, 看護実践を患者が言葉にする前に速やかに行わせる「情報想起」の役割があることが示された. また, そのような支援を提供されることが安心, 信頼につながり, コミュニケーションが促進されるという機序が示唆された.

本研究の最終的な目的は, 患者が求める看護師の迅速な対応を促す情報想起のモデルを開発, 提案することである. 重要な情報を想起できるものには医療看護支援ピクトグラムのような図記号の他, 識別タグ, さらに水分制限者に提供される飲水用カップなどの特殊な日用品も含まれると考えている. こ

れら物品の設置がその患者の状態を想起するきっかけになっていることは容易に推測できる. そのような物的環境を整理分類し, 患者が求める看護師の迅速な対応を促す情報想起モデルを構築し, 急性期病院に求められる療養環境デザインを提案したいと考えている. これは看護管理者が実践しなければならない療養環境マネジメントの中核をなすものである.



図：医療看護支援ピクトグラム

2. 研究の目的

上記の背景およびこれまでの研究成果をもとに, 本研究は看護師の迅速な患者支援行動を導く情報想起の現状について明らかにし, その役割を担いつつある, 医療看護支援ピクトグラムの活用状況とも合わせながら, 煩雑な医療現場での迅速で患者支援のための情報想起モデルの開発を行うことを目的とした.

3. 研究の方法

研究デザインは質的記述研究デザインである。

医療安全管理者や看護管理者は、患者への迅速な対応遅れに起因したインシデント、または、患者からの苦情を把握していると推測する。そして、スタッフや患者の特徴を配慮した対策を模索していると予測した。このような管理者の日々の考えや思いを明らかにするためには、上記研究デザインが適切であると判断した。

- (1) 迅速さが求められる患者支援項目にはどのようなものがあるか、また、迅速な対応のためにどのような環境を構築しているのか、そしてその成果はどうかを、(2)の対象となる医療看護支援ピクトグラム導入病院と同等の改築を控えた500床規模の病院の看護管理者および医療安全担当者を対象に、面接調査を行い明らかにする。
- (2) 医療看護支援ピクトグラムを導入している病院の看護管理者および医療安全担当者を対象に、医療看護支援ピクトグラムの活用状況を(1)で明らかになった患者支援項目を中心に分析し、情報想起としての医療看護支援ピクトグラムの有用性と課題について明らかにする。
- (3) (1) (2)の結果から、主要な専門家(現在検討中)とブレインストーミングし、患者が安心と信頼を実感する看護師の迅速な行動を促進する情報想起モデルを開発する。

4. 研究成果

1) 迅速さが求められる患者支援項目

患者の具体的な生活支援に関することが多く抽出された。具体的には介助を要する食事、排泄、動作への対応である。さらに患者・家族は必要な生活制限を忘れる、または介助を明確に求めて来ない現状から、明確に表現されない要求に「気づく」ことを期待していることが示唆された。

2) 情報想起としての物(医療看護支援ピクトグラムなど)

医療看護支援ピクトグラムは生活支援情報をピクトグラムにデザインしたものである。これらの表示は入院期間の短縮から、継続して同じ患者を受け持つことが困難な現状においては有用であることが示された。また、食事のための特殊な容器など(写真1, 2)の設えも情報想起に有用であった。



写真1：嚥下困難のための水分対応

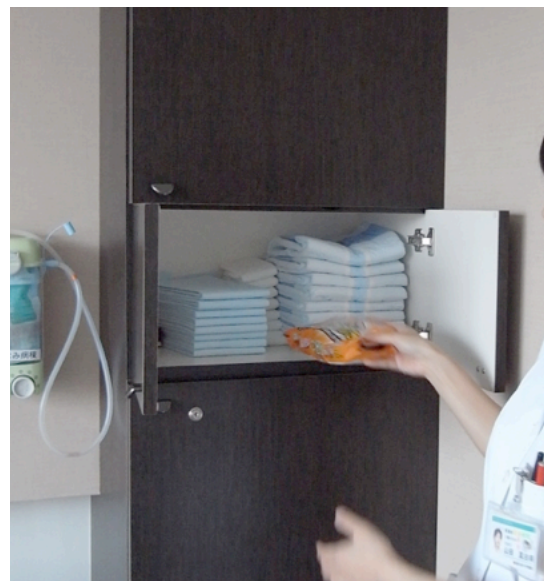


写真2：排泄介助の手順を考慮した物品

3) 場の特殊性と情報想起-情報環境別想起モデル-

情報を想起しやすい場として2つの場があることが明らかとなった。それはベッドサイドとスタッフステーションである。ベッドサイドには上記2)で示した状況がある一方で、スタッフステーションでは同様の情報をスタッフだけがわかる記号や略語で掲示していた。また、スタッフの動きや会話から気づいていることがわかった。これらのことから、場の特殊性、集まる人の特殊性を生かすことが情報想起に有用であることが推測された。

上記のことから、情報想起モデルとして下記が考案された。

■情報環境別想起モデル

2つの環境を情報想起を助ける環境として構築する。2つの環境とはベッドサイドとスタッフステーションである。

・ベッドサイド

患者・家族を意識した一般の方々も気づきやすい情報のデザインを活用した「療養生活支援情報」を医療環境として構築する。

・スタッフステーション

多職種スタッフの議論が必須な患者情報、例えば、退院に関する情報、を明示するなど、患者に関する検討に対するスタッフの動きを可視化する空間を構築する。

上記の情報想起のための環境構築は、ベッドサイドでは患者とその周辺に関心を寄せることになり、スタッフステーションでは他のスタッフの動きに関心を寄せることになる。このようなベッドサイドの環境調整では看護管理者たちが求めている「明確に訴えない患者」に気づくことにつながると推測する。また、スタッフステーションでの設えはチーム医療推進の役割も担うと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横井 郁子 (YOKOI, Yuko)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号: 90320671

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし